大阪大学美学研究室

卒論を仕上げる 2022

論文とは何か

論文とは、信頼のおける知識を伝達するための信頼のおける文章の形式、と定義できます。論文は、読み手とのコミュニケーションであることをまず意識したうえで、次の３つの点に注意する必要があります。① 信頼されるために典拠をしめす。発言の理由をそのつど述べるのも大事ですし、本文および註において典拠をしめすことが必須です。② 論文が提示するのは、情報の寄せ集めではなくて知識です。論文がしっかり構成されており、得られた情報から結論が導き出されていなければなりません。③ 論文の一定の形式に従わないとなりません。序論・本文・結論・注・図版それぞれについて注意すべき点があります。以下に詳しく説明しています。

論文の評価のポイント

□ 何について論じるか明確にできている（序論）
□ どんな結論を導くか冒頭で予告している（序論）
□ なぜそれについて論じるか十分説明できている（序論）
□ 先行研究をふまえて自分の論の独自性を主張している（序論）

□ 今日的で意欲的なテーマである（全体）
□ 一つのキーワードおよび一つの問いを中心に論を展開している（全体）
□ 明快かつ見通しのよい章立てとなっている（全体）
□ 力強い動機もしくは力強いメッセージが感じられる（全体）

□ 一次資料ないし現地調査にもとづく研究である（研究）
□ 外国語文献や読むのが難しい古典文献を参照している（研究）
□ 多くの注をつけて多くの証拠をあげている（研究）
□ 本文で行った考察から十分な結論を導き出している（研究）

□ 一つ一つの文が無駄なく簡潔に書かれている（文章）
□ 一つの段落につき一つの内容という意識で書かれている（文章）
□ 前提となることから丁寧に説明している（文章）
□ 根拠にもとづき客観的に説明をしている（文章）

□ 引用のルールに従っている（形式）
□ 注のスタイルにしたがっている（形式）
□ 必要に応じて図版を提示している（形式）
□ 図解するなど分かりやすく伝える工夫をしている（形式）

題目の確定

研究テーマはかならず研究題目（タイトル）のかたちで表明できるようにします。題目を考えておくと全体の構想がおのずとまとまるからです。題目はそれだけで内容を示唆するものでなければなりません。研究題目のうちに研究キーワードをかならず入れてください。なおここでいう研究キーワードとは、論文の中心概念のことなので、複数ではなく一つでなければなりません。中心概念がいくつもあるようにみえると焦点がぼけるので一つに絞りましょう。

XXX における YYY の問題ーZZZ の観点からの考察
XXX：自分の問題関心を深めるための具体例
YYY：研究キーワード＝自分の問題関心
ZZZ：自分の問題関心を深めるための方法論

□ 題目によって論じる範囲を限定できているか。
□ 漠然とした感じをあたえる言いかたは避ける。　…をめぐって
□ 題目だけでおおよその内容が分かるか。
□ 中心概念となる研究キーワードを入れているか。
□ 短い言葉によって一番大事なことを伝えているか。
□ 同じ言葉の重複は避けてください。
□ 次の言葉はなくても分かるので避ける。　…にかかわる研究　　…についての考察

論文の構成

卒業論文は、知識の多さではなく、知識がどれほど緻密に関係づけられているかで評価されます。芸術作品において構成の度合いがその質を決めるように、卒業論文もまた練られた構成がもとめられます。アリストテレスは、劇作品について始中終からなると主張しましたが、３部構成はたしかに引き締まった印象をあたえますし、論文の長さを20000文字と想定するならば、３章立ては妥当な数です。論文の分節（アーティキュレーション）は必要ですが、章の数にせよ、節の数にせよ、多すぎると全体の統一をそこないます。３の数字を基本とした以下の型にアイデアを落とし込んでみて、上手くいかなかったら別の構成を考えてみましょう。

はじめに			第１章			第１節
本文	→	本文も三分割	第２章	→	小見出しも三分割	第２節
むすびに			第３章			第３節

皆さんはすでに研究計画をたてるときに卒論の目次のかたちで書き記しておくよう勧められています。卒論の目次はすなわち論文の構成をあらわらす部分であり、卒論の目次をみただけで議論の展開をうかがい知ることができるようでなければなりません。自分の頭のなかで筋が通っていても、他の人にそれが伝わるのかを気にしておきたいです。明快な構成は、見出しが短く適切であるとともに、一定の原則にもとづいて論点がうまく配列されている構成です。

明快な構成とはどういう構成か？
自分の論文構成はどうなっているのか？

事項の並列　同等のものを並べるやりかたで比較をおこなうのに向いています。３人の人物を比べたり、３つの作品を比べたり、３つの事例を比べたり、問題全体をそのようにして浮かび上らせることができます。

歴史の区分　歴史を幾つかの期間に区切って各々の特徴を明らかにするやりかたです。歴史記述において、前期・中期・後期という３分割はしばしば見られます。誕生・発展・衰退はいうならば自然の摂理ですので、歴史を三つに区切るのは分かりやすいのです。

物事の道理　何かが起こったら次にかならず何かが起こるという道理をあらわすやりかたです。芸術理論においては、制作・作品・受容という分けかたがこれにあたります。対象の側の論理にしたがって記述するという性格を強くします。

論証の手順　ある問題を解決したら次にそれを前提としてある問題を解決するという手順をあらわすやりかたです。設定された問いにたいして議論を積み上げて答えを導き出すというときに取られます。主観の側の論理にしたがって論証するという性格を強くします。

事項の並列（例）	歴史の区分（例）	物事の道理（例）	論証の手順（例）
第１章　作家ａ	第１章　前期	第１章　過程ａ	第１章　問題ａ
第２章　作家ｂ	第２章　中期	第２章　過程ｂ	第２章　問題ｂ
第３章　作家ｃ	第３章　後期	第３章　過程ｃ	第３章　問題ｃ

論文の構成

□　他のひとに題目だけを見せて何について論じるのかを当ててもらいましょう
□　他のひとに目次だけを見せて話がどう展開するのか予想してもらいましょう

卒論の目次（例）　　自分の論文の構成　↓

図案家としての浅井忠

はじめに
浅井忠と図案

第1章　図案教育

浅井の受けた美術教育
アールヌーヴォーとの出会い
京都高等工芸学校での教育

第２章　工芸図案

光琳派の発見
陶芸との関係
漆芸との関係

第３章　印刷図案

絵葉書の魅力
ポスターの魅力
文芸雑誌との関係

むすびに
写生と図案

註
参考文献

序論で書くこと

■ 論文の主題　短く紹介
論じる対象について一言で紹介　「本論は　…について論じる」
論じる対象について簡単に説明　「…は　…の時代において　…であった」
論じる対象について結論を予告　「本論では　…が　…であることを明らかにしたい」

■ 対象に注目する理由(幾つでも)
当の対象について論じる理由１「…　に注目する一つ目の理由は…」
当の対象について論じる理由２「…　に注目する二つ目の理由は…」
当の対象について論じる理由３「…　に注目する三つ目の理由は…」

■ 論文の意義
意図を述べる　「本論は　…を明らかにすることで　…への関心をうながそうと試みる」
効用を述べる　「一連の考察をとおして　…が期待される」
展望を述べる　「一連の考察は…について考えるうえで重要な手がかりとなる」

■ 先行研究　→　論文の独自性
先行研究への言及　「Ａ氏の研究は…を明らかにしている」
独自の内容を主張　「しかし…はあまり顧みられていない。そこでこの論文では…」
独自の方法を主張　「そして…について論じるにあたり…の視点から考察をすすめたい」

■ 本文の前提について説明
概念の意味を定める　「…の語は…として理解されるときもあるが　…の意味でもちいたい」
経緯について述べる　「たしかに　…世紀にも　…はすでにみられた　…世紀になると…　」
背景について述べる　「この時代は　…であり　…がしばしば問題となっていた」

■ 論文の流れ
全体として何が重要か　「以下では　…に重きをおいて議論を進めていく」
論文の流れを紹介する　「第１章では…　第２章では…　第３章では…」
結論をもう一度述べる　「最後に　…が　…であることを明らかにしたい」

序論（はじめに）をしっかり書こうとすることで、自分の書いたものが論文としての条件を満たしているが自分で確認できます。上のように書けない場合、自分の研究にまだ不十分なところがあると考えましょう。たしかにこの通りに書こうとすると繰り返しが多くなりかえって煩雑になるかもしれません。大事なのは、上記の項目がすべて含まれていて、読み手に分かりやすく自分の論文をアピールすることです。読み手の信頼が得られるよう丁寧に書きましょう。

各章内部の構成

章はもっとも大きなまとまりですので章の始まりはページを改めてください。章の冒頭では、章への導入をおこなうとともに、何について論じるのかを明らかにします。各章の本文は、小見出しによって３つくらいに区切るとよいでしょう。

第１章　○○○○○

章の内容への導入　　（そこで本章では…）　　章の内容の紹介

２行くらい空ける

小見出し１

（本文）

２行くらい空ける

小見出し２

（本文）

２行くらい空ける

小見出し３

（本文）

引用について

引用とは、他の文献にある言葉をそのままのかたちで自分の文章のなかに引くことをいい、引用はおもに自分の議論の正しさを証明するためになされます。引用文をもし証拠としてもちいるのならば、引用文をたくさん含んだほうが良いのですが、引用文はあくまで証拠なので、引用文それ自体に語らせてはいけません。引用文の注意点はおよそ次のとおりです。

□ 引用はあくまで補足として用いる。
□ 引用は長すぎてはいけない。
□ 加筆したり訂正したりせず原文のまま。
□ 註などで出典をかならず表記
□ 孫引きをしない。原典にあたる。

引用の欠点は、地の文章の自然な流れを寸断してしまうという点にあります。私たちは地の文章のうちに引用文をうまくなじませる苦労を強いられます。短い引用文は「カッコ」をつけて本文のなかに入れます。長い引用文は改行のうえ、前後１行ずつ空け、行頭を数文字下げます。

長い引用

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

　　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
　　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
　　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ (21)

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

引用するとき「言った」「述べた」がよく使われるのは、文脈を選ばず使用できるためですが、引用のたびに「言った」「述べた」ばかりだと単調になります。引用するとき「言った」「述べた」のかわりに、状況をあらわす他の言葉を選んだほうが記述はより鮮明になります。代わりになる言葉をここにあげてみましょう。

論説文のなかで引用文をひとつの証拠としてもちいるとき、引用文に語らせてはならないのならば、説明のあとで引用がくるはずです。論述はそのほうが滑らかに進むでしょう。ただし、文献解釈に力点がおかれる場合には、引用のあとに説明がきます。私たちはあまり自覚しませんが以下のような違いがあります。

説明＝主張 argument　　引用＝原典　original
　　↓　　↓
引用＝証拠　evidence　　説明＝解説　commentary

注は多く

注をつけけるのは根拠をしめすためです。注を多くつけるとよい理由は、注を多くつけようとすると自分があまり根拠なく発言しているところを発見できるからです。注を多くつけようと努めることで、論文はより説得力をもつようになります。注の様式については色々ですが、参考例を下にあげています。書籍の表記のしかたと論文の表記のしかたが違うところなど注意してください。

1. Nikolaus Pevsner, *Pioneers of the Modern Movement: from William Morris to Walter Gropius* (Faber & Faber, 1936).
2. Irene Sunwoo, "Whose Design? MoMA and Pevsner's Pioneers," *Getty Research Journal* 2 (2010): 69-82.
3. Paul Greenhalgh, ed., *Modernism in Design* (Reaktion Books, 1990), 8-14.
4. アドルフ・ロース『装飾と犯罪ー建築・文化論集』伊藤哲夫訳（中央公論美術出版, 2011 年)。Adolf Loos, *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Adolf Opel (Lesethek, 2010).
5. ロース「文化の堕落について」, 同訳書, 82-89 頁。Loos, "Kulturentartung," *ibid*., 339-362.
6. 村山知義「構成派批判ーソヴェート露西亜に生まれた形成芸術の紹介と批判」『みづゑ』233 号（1924 年 7 月）2-15 頁, 235 号（1924 年 9 月） 9 -13 頁。この論文はすぐに次に再録された。村山知義『現在の藝術と未来の藝術』(長隆舎書店, 1924 年), 新版（本の泉社, 2002 年)。
7. 岸田日出刀『過去の構成』(構成社書房, 1929 年)。
8. 同書, 22 頁。

参考文献表

Colin Rowe. *The Mathematics of the Ideal Villa and Other Essays*. MIT Press, 1976.
Christopher Wilk, ed. *Modernism: Designing a New World 1914-1939*. V&A Publications, 2006.
メルロー=ポンティ『知覚の現象学』中島訳. みすず書房, 1967-1974.
山脇道子『バウハウスと茶の湯』新潮社, 1995 年.
藤田治彦編『近代工芸運動とデザイン史』思想閣出版, 2008.

図版をつけよう

図版も必要なかぎり入れる。本文中に埋め込むのがいいでしょう。
URL もしくは出典を明記する

図１（左）無印良品ポスター「わけあって安い」1980
図２（右）無印良品ポスター「愛は飾らない」1981
https://www.MUJI.com/jp/flagship/huaihai755/archive/koike.html

確認しよう

文字の大きさは 10.5 もしくは 11 ポイント
本文はＭＳ明朝またはそれに類する書体に統一
半角は Times New Roman または Century に統一
１桁の数字は全角、２桁以上の数字は半角
目次と各頁それぞれに頁数を付ける
短い引用文は「 」をつけて本文のなかに入れる
長い引用文は、引用の前後を１行ずつ空け、行頭を字下げする
書名は『 』でくくる。論文名は「 」でくくる。作品名は《 》でくくる。
カッコ類は全角をもちいる